

小伊普物語 下

^ 13
2908
3



門へ13
2908
3

忠義小伊曾物語三

岳亭定岡戲編

○胡蓋とさうと喚出と雪隠

淡作のつひみ二心まゝかゝるひのものを頼こ

てそこをくの路金をのこせ歡八をよびみま

しるさしてそれより五六日たてのころりけ

行田屋よりたのやと三四丁へさうして後夜を雨

まゆんとりふ宵徳の高入あり今度よんどころ

昭和九年
七月六日
購末

ふらふら急用ありて大阪へのがるふつと浴衣田五まい
るふらふらの草物帯うらまわりの夏がつと三尺
さぬぐひ袴絆までらうくのあつておけ竹田
屋へは支るものも大らそむいものことされども
久も得意なるれづらうらそむい仕立やうく間お
合せ彼是代金十支何ぐ一まぐふ徳取がこ
ちて代りのいふらうきふつと小吉ふのこせつら
へらう小吉の急ぎ糸を一行あつてひの代め

のこらうとこらうとこらうまのなうこあてり明ねへ出
立のお入日ふれづそのあつて大らうらうらうらうらうら下
へと大らうらうらあゆみのあふあふせられ小吉のあ
らうらうらうらあて日暮までたあで待たうらうら
六つ半時ころふあふより代金をめりて出てこ
を小判で十支と残せうらうら小吉の清とら
がまこまぐふおこらう金うけらうらとあををつげ
それより外面へ立出なれが今宵廿日の宵や

ろう用意の提燈ていとう火ひをとの〜は丁ていざうり
 きじじぐ小吉こきちのふ後ご痛いたして大便だいべんのきじ
 あつたれたれのそとふふ重ちゆう徳とくあつて用もちとさんと見
 まのせせばば爰えんふ一軒いつけんの料理りやうり茶ちや屋やありそのこ
 うふ不ふそと路ろ次じあつていふこそせうらんある
 ろうあつその路ろ次じより入いてかく突つふく行ゆていれれば
 ま〜と一ツいつの重ちゆう徳とくあつ下男げなんなどの通うせうらん
 せうとむむいいらう〜げげらう小吉こきちあつあ爰えんめて用もちを

してやぶやぶて立た出でちらんちらんとせ〜と〜と
 をとせとせまのせせぶぶの料理りやうり茶ちや屋やの店みせ先まめてま
 つのつ悪あくささ板いた塀べいらう其そのうちふひとつつのたま
 せせ〜と〜とあつあ爰えんふ二人ににんをらうの客きやくあつ小吉
 何なに心こころきくきく塀べいののああ〜とと穴あなよりと〜ののぞぞとといいれれば
 けけとといいれれば〜とといいふふ海うみののそととああるる男おとこのの後ご作しやくあり
 あつあつつのの髪かみ髭ひげががららううとといいふふ〜とといいふふ〜とといいふふ
 雲くも助すけとといいふふ男おとこありあり小吉こきちあつあ〜とといいふふ〜とといいふふ



小
レ
カ
三

四

まどく^{まどく}其^{その}のもちの田平が妻^{つま}のお加奈^かを拙者^{せつしや}
 が女房^{みよぼう}かして行田屋の家^{いへ}もコがものところへん
 さうしてさうのつらうさうへ何^{いふやう}様^{やう}ある也^{おほい}れもはじ
 何^{なん}分^{ぶん}骨^{ほね}まうこのむらうとしくが雲助^{くもすけ}こそ
 てそれこそこのつらお舞^まづらひあるまもんま
 志^しおかせませうさうなるが行田屋の田平と
 やら千年^{せんねん}ふど心前^{しんぜん}ふ二度^ど又^{また}うけむかひ
 の人^{ひと}今^{いま}でもさういふ年^{とし}もよめられしんめ

見えちがへさうま志^しくちうぞん^{ぞん}夜^よ振^ふみぞん^{ぞん}後^ご
 振^ふくさくからして下^{くだ}されとらひ後^ご作^{さく}らまづこ^こ腰^{こし}
 かちやうしてまよひさうへ田平^{でんぺい}が夜^よ後^ごの役^{やく}とさう
 その外^{そと}着^きぐのうすくもで妻^{つま}しく志^しじてに
 やまひ供^{たね}ののめり二人^{ふたり}まう一人^{ひとり}のせの高^{たか}く一人^{ひとり}
 せのひく^{ひく}まんともみあがしあつ是^{これ}くらうさう
 のめきうさうかひ又^{また}さうしつらう紙^{かみ}みへ上^{うへ}
 ぐこを島^{しま}月^{つき}廿^{にじゅう}二^に日子^ひ出^でまうこのころつすれ

もおまのこことそまゝに顔してさるせーが今
のまゝをさうらけやふの捨おれどと先
庭のひらき戸うのの外面お志のび出つゝ
おのひめづまふの談作の外の人のこと
りあまざり川あて飢死お身を投んとま
しを田平さるふことけられ今での安楽せ
の身のう其大おんをこそまれをてま人のお
室お加奈さると密通さると大罪うふ又

そのうふ道中して田平さるを殺し竹田屋
の家をうむひお加奈さると主婦ふる人との
何ごごやまことおく何ともことごころ人非人
望ともをやく番頭とのおお志せや親しい中
の内相談上方へ急手紙さうじやくと一助お
かけいせーが立とぬりやことつぐとあやう
世こと番頭をえぬ親族うち志せると何
とらふてもまごの強がんその上書こののとて

もみろ無^む徒^た扱^ある^る一^いつ^つも^も立^たて^てお^おく^くる^るや^やの^のこ^こと
る^るれ^れが^が世^せに^に發^は明^める^る發^はさ^さく^く際^{さい}を^をか^かく^くま^まと^とり^りひ
み^みさ^さが^がか^かつ^つて^てこ^こう^う身^みの^の災^{さい}難^{なん}と^とら^らる^るお^おの^のめ^めで^でも
ま^ま一^いと^とや^やか^かく^くと^とひ^ひや^やど^どら^らう^うち^ちお^お田^{でん}平^{へい}さ^さの^の中^{ちゆう}身^{しん}
の^のう^うへ^へお^お何^{なに}ご^ごと^とぞ^ぞあ^あら^らう^うの^のち^ちの^の後^{こう}悔^{かい}と^とも^もお^お
あ^あら^らう^うと^とか^かく^くお^おま^まへ^へ田^{でん}平^{へい}さ^さの^のお^おい^いの^のち^ちお^おさ^さ
さ^さく^くつ^つり^りな^なら^られ^れば^ばあ^あら^らう^うと^とで^でた^たら^らう^うの^のご^ごう^うと^とも^もあ^あら^らう^うと
今^{いま}よ^よう^うの^のま^まに^にお^おか^かけ^け落^{おち}して^て上^{かみ}方^{かた}の^の助^{すけ}一^いつ^つも^もさ^さ
望^{ちゆう}と^とも^もを^をや^やく^く田^{でん}平^{へい}さ^さの^のお^お目^めお^おか^から^らう^うこ^この^のこ^こを^を
お^お考^{こう}へ^へせ^せや^やこ^この^の道^{みち}う^うら^らう^うと^とお^おう^うと^とや^やを^を是^{これ}より^{より}
不^ふふ^ふ思^し業^{あん}の^のま^ま一^いつ^つも^もこ^こよ^よひ^ひの^の七^{しち}月^{げつ}廿^{にじゅう}日^{にち}の^のま^まに^に
宵^よや^やを^をさ^さい^いと^とひ^ひ子^こ呂^ろ川^{せん}宿^{しゆく}ま^まで^で迹^{あと}の^のび^びん^{びん}さ^さう
と^とや^やく^くと^とひ^ひと^とう^うご^ごち^ち小^{せう}吉^{きち}今^{いま}年^{ねん}十^{じゅう}四^し歳^{さい}あ^あと^と先^{せん}
の^のか^かん^{かん}ぐ^ぐら^らみ^みく^くと^とま^まく^く忠^{ちゆう}義^ぎの^のち^ちを^をい^いの^のま^まち^ちの^の
ま^まに^にあ^あら^らう^う海^{うみ}乃^の助^{すけ}上^{かみ}と^とさ^さう^うと^とし^しを^をさ^さう^う
○忠^{ちゆう}義^ぎの^の身^みを^をも^も暗^{くら}く^くと^と宵^よ闇^{やみ}

望^{ちゆう}と^とも^もを^をや^やく^く田^{でん}平^{へい}さ^さの^のお^お目^めお^おか^から^らう^うこ^この^のこ^こを^を
お^お考^{こう}へ^へせ^せや^やこ^この^の道^{みち}う^うら^らう^うと^とお^おう^うと^とや^やを^を是^{これ}より^{より}
不^ふふ^ふ思^し業^{あん}の^のま^ま一^いつ^つも^もこ^こよ^よひ^ひの^の七^{しち}月^{げつ}廿^{にじゅう}日^{にち}の^のま^まに^に
宵^よや^やを^をさ^さい^いと^とひ^ひ子^こ呂^ろ川^{せん}宿^{しゆく}ま^まで^で迹^{あと}の^のび^びん^{びん}さ^さう
と^とや^やく^くと^とひ^ひと^とう^うご^ごち^ち小^{せう}吉^{きち}今^{いま}年^{ねん}十^{じゅう}四^し歳^{さい}あ^あと^と先^{せん}
の^のか^かん^{かん}ぐ^ぐら^らみ^みく^くと^とま^まく^く忠^{ちゆう}義^ぎの^のち^ちを^をい^いの^のま^まち^ちの^の
ま^まに^にあ^あら^らう^う海^{うみ}乃^の助^{すけ}上^{かみ}と^とさ^さう^うと^とし^しを^をさ^さう^う
○忠^{ちゆう}義^ぎの^の身^みを^をも^も暗^{くら}く^くと^と宵^よ闇^{やみ}

さても竹田をぬく四ツの鐘かねのうるやとて小吉が
かへらざれば外の丁稚ぢやうぢをつらひめては篠登しののへは
ふつらへられれば小吉の宵よひのふどかへりて
とも金子も十あつては清しみずとらうぐき足こふあり
とてつんせられつらひの丁稚ぢやうぢもかへりてこの
をゆき番頭ばんとうもあ家内けいだいののこもあつてこの
おもひをさる一日ごろ正直まことらうさんやいの小吉よ
めやとらあげもらうとてやぶ今いまをに待まちて見よと

やめてどもく一向いこうさるハツのかひのあつて
お小吉が宿やどをよびつらひられれば宿やどの余次郎よじろう
早はやそくさる番頭ばんとう代助だいてすけもあつてはなまを
ゆめて大さふおとらうとて小吉おあつてはなまを
てさるつらひの奴やつとつらひめりてあつては
いっらる天魔てんまがえられやとらう十兩じゅうりやうとてこの
金子かねとらあげせよとらかてんあつてはなまを女め郎ぢやう買かひ
の味あじもあつてはなまを肉にく焼やきあつてはなまを買かひや

何おのこしては早東しづみやぐー何とぞ明日
おではあつげトまじとひすたのいんせう
今おでがは舞おりの小吉がまゝのわがとま
もとのあつてあつてあつてあつて余は
こが家おろし女房おもははをぬぐわれば
女房もあつてお小吉がまゝあつてあつて
とらまゝのいんせうのいんせうのいんせう
うーかゝるを理るれそれにしておきけ余

次ぐの篠登おゑのんこ一数年未出入のの
あて明おのゑおんが供をして大坂への
べき物そく仕るものさうさうのひくを小吉
がかけ落おて明日の出立かまらひぐあせつ
ごろお篠登へさうはよーを妻しくぬの
がら小吉こと明日あもあれひり早そふ
おひつみやぐーぬーおひ田五日もあつてひ
かぢびの店とよ何とぞあつてあつてあつて

やうおとひのさむらの終ぐひあゑのんびめてそれの
まろくう災難とやめののら〜かゝる〜ころろ
まかせふらさせとのことそれの子方あつがこゝろ
仕合せめてあち川端まで市あつらふあある
ぐとああけまで雨あめの人〜お居つづけ次
の目の大勢の人〜とともお雨あめんが旗を
あつら次子お川端の役あて十四をあつらる小
下雅とあつらひらむとやと〜づひなれば役あての者

〜してあつらるるもの一向をけぎさつらるる
十四五さいころ伊勢あつらの子ごころあつら今
朝二三人とあつら〜其うちあつらあつら
やとらお余次郎さつてよものやぬけあつらるるぞ
おへ行か〜とおひそのあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
それより小吉が行旅を毎日〜つらあつらあつら
ど一向あつらあつらあつらあつらあつらあつら

○次皿ぬまんご金をうひを次皿ぬまられと道中みちちゆう

去さる不ふど小吉こきちの品川しんがわ宿しゆく小一こいちあううつつぎぎの日ひ
柄ひま枚まとと友とも並なら糸いとどどのむむろろ一いちかかひひをを買かひひて
伊勢いせちちああのの童どうののままどどううもも朝あさももここのの
外そとををくくくくももちちををららささぎぎ一いつ刻くわくももををくくははらら
まま人ひと小こおお目め小こかかううくくととおおゆゆよようう外そと他たもも
ろろ一いち雨あめふふらられれ家いえみみぬぬれれ宿しゆくみみつつててももよよままががくく
秘ひめめししぎぎををくくくくちちおおそそくくととややううくくくくちちををらら

ハいままげげざざもも子こどどももののああののままららどどううもも今けふ日ひと
ととああのの羽あしととももいいややううくくふふ丸まる子このの宿しゆくああどどううもも
ろろ小こ吉きち篠しの屋やををてて清きよととらら一いちををららひひのの金かね子こ十じゆ
ああののちちちちちちちちちち二ふた歩ぶをを路みち金かねとと一いち枚まいとともも
ちちんんちちととああのの命いのちををつつららぬぬままどどののここももああて
ままももここもも不ふ用ようああるるととよよししららぬぬままどどののここのの金かねはは
かかくくかかくくくく色いろももららぬぬままどどののここももああららぬぬままどどののここもも
ししててままららぬぬままどどののここももああららぬぬままどどののここもも



ハ
シ
ノ
ミ

十
四

この不とうの悪めのもぐかぎつけて丸子の宿
よう跡をつけあとおるの先おるの岡越の宿
もさつのはま死ハをいとしらふさうおさくか
愛ゆて一人の男せの高くう悪くおるこはる
ど小月代まぐく怒むやくと生ひ出さるが小
吉おをいしつあはうはころまめ眼ぐ見えぬ
まうぬどもを中へ人おつきあうこびををも
いとどそまうぬ顔あつていさうめとらひさるお

ころ狭のごときおさうさうさうあて四ツ五ツ擲
のめま小吉もまめめの不どの買ドとらと
これとともおるうととおひひゆ急途のえん
とかけのいさをのがさうと追つめてやうさ
うお打こをま小吉の顔ま足るどはま
つきとが店免ごあんといびくれどまうく
むとあて打かる其ところへ土地の人とつええ
五十むかりの老父かけまうの悪者をつき

しきをこゝ小吉を引かこゝへてをとりてまゝく
世方(まき)とらふ小吉の何(なん)のさだま人もるく
しきこらうてうの老父(おやぢ)があとよつてまゝに
行(ゆ)ふ海道(かいどう)ようび(う)ら(う)をむら何(なん)れともまゝぬ
まゝをめつてやうらと走りたるがらうのるあう
入(い)れん森(ま)んくさる杜(もり)のるふぞをむらる小吉
あゝびおどろきかやうる船(ふね)ふらうるがやの
いろうる目(め)ふらあふべゝあゝのさうんとまゝる船(ふね)

あゝ二三人のころめのもじりまようあゝれ
はの(は)をむらまぎと小吉をむらしてあゝせ帯(おび)
引(ひ)くとま衣(い)後(ご)をまぎとる懐(ふく)ふかゝゝめら
しゝかの金子(かね)九(く)友(とも)二(に)歩(歩)のころまゝくさひる
小吉(こきち)の血(ち)あゝるまゝあゝつてあゝ盗(ぬす)人(ひと)よまゝらうらよ
と大(お)声(こゑ)あげてまげとも人(ひと)里(さと)をま杜(もり)の中(なか)れ
まゝのるまゝらうるあゝらうまゝあゝれまゝ
ころ老(お)父(ふ)も行(ゆ)がまゝまゝまゝのるまゝのるまゝ

のとよへ長後帯さゆのちびうへ小づらせみひ残せみまでのこらむ
 うぞひ小吉あらしをあらし赤裸あらしあへてその不なとら河
 の中なかへごんあうと投なこんでうづくともるく連なを
 ち小吉この河がへうちこまれ一丁ちやうをありうきつ沈しずつ
 るぐれくあうくひとつの抗かあうつき志しがく
 息いきをつぎあうそれよう木の根ねをふささう
 つきからうぐて岸かをひあうりたれど骸をさく
 へいぬびもくあまのこもさるまいのたら

へいぬせんとく居あらうくづつくぐとお
 のいやうともかくのいどく丸まる裸はだかあて道みち中なか
 うのづら一いちのろ用ようもられば
 一いち日にちのいふもちづくく飢うて死さる心こころ
 ちやうの道みち中なか小こかたをひを晒さんようの河
 小こ飛とりつて死小このあうぐとあらうび川へとび
 りんとせうがやういおめいやう今いまこれは川小
 て死るらばま人ひと田た平へいさるもうの雲助すけのこ

めお空しくお果るさるべしは身の命のおく
かゝれどおとさるなをとおしきけおしひび
これおでさるかひもな〜今二三日生のび
るべ田平さるおお目おかるもわめて必定りぬ
夏るまぎば衣服へみくまど後へるくとも野お
ふしく木の實をひろひ食とま〜水をのん
で命をつるまご二日や三日のどろ〜ともは生て
居られぬことあるおまど〜一刻もなやく海ごう

筋へいでおる人田平さるおひととびお目お
かゝるおまごどろ〜く〜んで命をつるまかん
さう〜や〜とひとろ〜ごち忠義おこつ〜ひと
お助のまちまをゆ〜めて七八丁田甫つ〜おひお行
ろろ〜夏おひとつ〜の村あり若ら男ごも五六
人たらるる樹の下お殊暑者をさけて涼わら
小吉ハ立より腰をおごちうの男ごもおむらひ
てらよ〜〜〜伊勢へぬけまわりのものなる

ぶ今日このへんあておらさざらあひ衣ころも披ひひ
 もらうらん路ちよ金かねおどのこもどとどこれそのう
 小川の中あうちこまれまどふ死しんとし
 しまやうくSのちまてあつてこれあどあどら巻
 りひども店たらんのだとく赤線あかぢあことふしめん
 の残のこもみこひむのやうやうあむあむあむあむ
 しかどおむお細こ細こむむの古ふるあむあむあむあむ
 めどと下くだささららははむむくく世よ々々こもれあうあうははししはは

とらむいさむうふいぬさくれを若者わかしよめともい
 けこをむむ大おおおららししむむいいももくくななけ
 るむいむむSむむむ近きん年ねんこのへん物ぶ發はつ
 あしやもまれむおひまむよ入ひと殺ころよとこの
 ぶらゆりむい入いるむむむむむもそむい
 りまのどく千せん万まんささどどうう難なん張ぢやうるむむくくややら
 るふは死し不ふ遠えん苗めう明めいあち出でむむむむ
 よSむむむお世せ活かくSむむむむむむむむむ

引つられあゝをなやめてらそそむく若ものども
ハ小吉がわがのこえゆる不どら並木のう入ふ見
おろ居てこが家くお帰らる

忠義小伊曾物語三終

○附言

この物語の巻の海より文とくみりたりふりこ
夏よりむむ人こひて何をこひと何をこ
かきふるみやとあやとあふことあふぬべこま
いあへんさくうあうら昔くころをある書のま
ふり見ゆていと長く引のむとかくつづま
出せらる小吉と入る丁稚伊曾と入る下女
とが傳をあるこれが小伊曾のころと名

づけ〜まのいぬのしん長むかきものびがうるれがた乃
一編ひん巾ひんのうまとうぐ〜後ごへん三編さんとつてきてあ
〜いびそめあ〜ろまことあぢりひめゆ〜け
まゝおめらうて丁推てうちの小吉こきちのいせん劫げつあうける
田のの女まめがうあひそのち糸いと糸いとをひきぬもんおも
りであひ大井おほい川がわをこらういろくさるぐと難なん法ぽう
て主人まぢい田平でんぺいめもゆぐあひず諸もろ邪じをうぐとさる
よひあるモ子せん辛しん万まん苦く〜忠ちゆう義ぎをしくまこと

又竹田あさうらう屋やの食客しやくしやく後ごさ〜でんぐとおぢいのでつ
い母ははのお加か奈なを女房にようぼうみる〜竹田たけだ屋やの家いへを相あひま
續つづ〜いも〜二月ふたつきも〜まざらうちら〜う
〜いごまひをを〜高たか浦うらと〜る領城りやうじやうめふうく
をる〜ら〜身みうけを〜かこ〜おま〜いご
お加か奈なをころ〜て高たかららを女房にようぼうみせんとき
る〜下女げにようめの伊い曾そが忠ちゆう義ぎめて主人まぢいの〜のちをす
く〜んと〜遠とほ〜いび格かくめあひむま〜い〜と艱かん

鶏けいくらうするまのとう糸いとやあ羽う糸いとのんが男舞まひてらう
くいひひのこ雲くも女を歡あハが悪あく計けいひて後ご作さく
をこむろうも不ふくの金きん子すをむさがううとる竹たけ田たやの
田た平へいの談さくが奸計けいひよりてさるぐの災さい難なんひ
あひをそのらりの身みとるううまごふ命もあ
やふとらを小吉きち伊い曾そ田たのまひらが忠孝ちゆう小
よりてあやうまらのちをことう家いかること
勉けん者しやうの田の女が男力りきこご一い命めいをととあまんの

雲くも女ををころこ父ちちの命をとといひ猶又またけいのせの
高かう浦うらるらび小談だん作さくとの不ふ幫ま間ま押お客きゃく大だい松しょう
のをころと母をとまし後のちの終ふとらの身み
とこもむる命をとらふままで二編へん三へん
あてまして見物けんぶつさらぬういふらうとら
由よし判はんの不とひとふねづひあげいましていらしとら
小こらのめのごう附つき終

忠義ちうぎ小伊曾こいそ物語ものがたり後編こうへん 三冊

忠孝ちうかう水水みづみづ川がわ後編こうへん 三冊

同 三編 三冊

文政十丁亥春

東都書房

西村屋與八

中村屋牽藏

忠孝

